



# 館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 4 月 12 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

## カタクリ



世の人々は、桜ばかりに気を取られ、足元にある紫色した小さな妖精の存在を忘れがちですが、山登りやハイキングが趣味の皆さんなら、きっと分かってもらえるはず。カタクリは、「春の妖精」(スプリング・エフェメラル)と呼ばれる植物の一つで、エフェメラルとは、もともと「はかない命」という意味で、カタクリが1年のうちで地上に出ている期間は、春先の4～5週間足らずに過ぎず、葉で光合成をして栄養分を鱗茎に蓄えて、夏には葉を枯らし、翌年の春まで土中の鱗茎のまま休眠状態で大半を過ごしているというような、目立たないやつなのです。光合成ができる期間が、1年のうちで葉が出ているわずかな期間しかないため、栄養を蓄積するまでに長い時間を要してしまうことから、種子から発芽して花を咲かせるまでにはなんと、7～9年もの歳月が必要です。

各家庭の台所には、大抵「片栗粉」が常備されていることと思います。かつて「片栗粉」は、カタクリの球根から作られていました。カタクリから採取したデンプン、片栗澱粉は生薬でもありました。滋養保健によく、クズのデンプンのように腹痛や、体力が弱った人への下痢止め作用もあるといわれています。カタクリのデンプンを、砂糖やはちみつで甘くして、熱湯を注いでかき混ぜると半透明にやわらかく固まり、これを体力の弱った老人や幼児の腹痛に食べさせると、下痢止めに役立つとされています。しかし、一般に市販されているジャガイモを原料とする「片栗粉」では、カタクリのように薬用にはなりません。

カタクリの花は、早いところでは3月、ふつうは4～6月頃、10～15 cmほどの花茎を伸ばし、直径4～5 cmほどの薄紫から桃色の花を先端に一つ下向きに咲かせます。カタクリは両性花で、自家受粉による種子の形成はほとんど行われません。花被片、雄蕊、雌蕊は紫外線をよく吸収し、ハチ目などの昆虫の視覚器官が感受しやすく、花へ誘発するシグナルとなっているようで、クマバチ、コマルハナバチ、マルハナバチ、ギフチョウ、ヒメギフチョウ、スジグロシロチョウなどが吸蜜に訪れ送粉者(ポロネーター)として受粉を行っています。

そして、何より興味深いのは、アリによる種子の散布です。トゲアリはカタクリの種子を巣内に運び込んだ後に、巣外に搬出し周辺に散布します。種子に付着しているエライオソームには脂肪酸や高級炭水化物などが大量に含まれており、これに誘引されたアリはエライオソームをつけた種子を巣まで運び、エライオソームを食料とし種子本体を巣の付近に廃棄することで種子は散布されると考えられています。



## カフネ

2025. 4. 11 朝日新聞「天声人語」より

第22回本屋大賞を受賞した阿部暁子さんの小説の題名が「カフネ」。ポルトガル語で「愛する人の髪にそっと指を通す仕草」のことだそうです。ブラジルで使う独特の言葉で、植民地時代、ブラジルにはアフリカから何百万人もが奴隷として連れてこられ、サトウキビ農園で働かされました。カフネの語源は西アフリカのヨルバ語とされています。小説では、主人公が働く家事代行サービスの社名として登場します。